

女子大生の肢体不自由児観に対する日越比較研究

都 築 繁 幸 (愛知教育大学障害児教育講座)
(2003年11月28日受理)

A Comparison Study between Japan and Vietnam on Women's Students Views toward the Physically-Handicapped

Shigeyuki Tsuzuki (Department of Special Education, Aichi University of Education)

要約 日本の学生は、ベトナム学生よりも障害児に対するイメージが曖昧であり、肢体不自由児を拒否する傾向にある。その一方、日本の学生はベトナムの学生よりも道路や公共施設の改良を求めており、肢体不自由児自身を幸福だと思っておらず、出会ったときに当惑したり、担任教師や友達の重荷になると考えているようだ。これらのことから日本の学生は、肢体不自由児に対しては社会的に望ましいと思われる要求事項には賛成していても実際の態度は非好意的傾向であると推論される。

Keywords : 日本、ベトナム、女子大生、肢体不自由児、障害観、比較研究

I. はじめに

我が国において障害児・者に対する態度やイメージの研究は様々な観点から行われているが、外国との比較研究はごくわずかである。三沢 (1971) は、日本・アメリカ・イスラエルにおける一般人の意識を検討している。三沢ら (1983) は日本、韓国、及び台湾における障害児・者に対する態度を研究している。中司 (1988) は日本と韓国における肢体不自由児に対するイメージを比較し、韓国の大学生が主としてマイナスのイメージを形成しているのに対して日本の大学生がプラス、マイナス両方のイメージを持っていることなどを示している。中司 (1992) は日本と韓国における大学生による役割理論にもとづいた運動障害者のイメージを比較し、運動障害者は積極的に行動する役割にもとづくイメージになっており、日本の大学生が持つ障害者のイメージは、まだ不十分ではあるが、次第に好転しつつあると指摘している。

このように近年、アジア諸国との比較研究がなされつつあるが、対象は、韓国と台湾だけであり、ベトナムとの比較研究は見られない。ベトナムはベトナム戦争終結後の現在でも地雷や不発弾で死傷者が出たり、枯葉剤の影響で「奇形児」が生まれている。障害児者を取り巻く社会・文化的環境が人々の障害者への態度構造に反映すると考えるならば、戦争による後遺症が現在もなおより顕著であるベトナムと我が国とを比較検討することにより、こうした点がより一層明確になるとと思われる。

本研究では、アジア諸国のうちで肢体不自由児に対する態度構造の比較研究がなされていないベトナムを取り上げ、日本とベトナムの女子学生が肢体不自由児に対してどのようなイメージ、態度構造をもっている

のかを明らかにする。

II. 方法

(1) 調査対象

ベトナムは、ホーチミン市内のA大学 (教育系の大学) の女子学生104人とした。

日本は、B県内の短大の幼児教育学科、教養学科85人とした。

(2) 調査期間

ベトナムは、平成8年2月末に実施した。

日本は、平成8年7月中旬に行った。

(3) 調査

ベトナムでの調査はベトナム語に翻訳した調査用紙を用いた。この調査用紙は、日本語の堪能な日本在住のベトナム人学生によって翻訳され、さらにホーチミン市障害児教育研究センター関係者に手直し・確認された。

調査1 : SD法に基づき「肢体不自由児」、「老人」、「孤児」、「健常児」に対するイメージを調査した。質問紙は「良い-悪い」などの形容詞14対からなり、5段階で評定するものである。

調査2 : 肢体不自由児の生活自立に関する態度を調査した。質問紙内容は河内 (1979, 1990) を参考にダミー2項目を含む20項目とした。18項目の内容構成は、特殊能力、依存的な自己中心性、社会保障、幸福な暮らし、自立生活の否定、共に生きることへの拒否、情緒不安定な性格、統合教育相互作用についての当惑の9カテゴリーを設定した。回答方法は5段階評定法を用いた。

(4) 分析の視点

①両国間における「肢体不自由児」、「老人」、「孤児」、

「健常児」という語に対するイメージの差異を検討する。

②両国間における生活自立に関する態度を比較する。

③調査1のSD法のイメージの高い群、低い群に分けそれぞれの群が調査2の態度構造の面でどのような傾向を示すかを検討する。

III. 結果

(1) SD法によるイメージの差異

「肢体不自由児」、「老人」、「孤児」、「健常児」の用語に対するイメージをベトナムと日本で比較した。その結果を図1から図4に示す。「健常児」で両国の差が比較的はっきりと出ている。一方、「肢体不自由児」、「老人」、「孤児」は良く似た傾向を示している。ベトナムの「健常児」に対するイメージは全体的に肯定的なイメージが持たれている。ベトナムよりも日本の方が全体的に「どちらでもない」を中心とした曖昧なイメージを示している。

(2) 生活自立に関する態度

図5は、両国の各項目の平均値を示している。

有意差が見られた項目を中心に両国間の特徴を示す。ベトナムの学生は日本の学生よりも肢体不自由児自身を幸福だと思っている ($t=8.60, df=187, P<0.01$)。日本の学生は道路や公共施設の改良を求めている ($t=4.82, df=187, P<0.01$)。しかし、実際には日本の学生は、ベトナムの学生より食事場面や生活場面で肢体不自由児との接触を避けたいと思っている ($t=2.22, df=187, P<0.05$)。また、日本の学生はベトナムの学生よりも肢体不自由児と路上などで出会った場合、どのように話しかけてよいかわからず、援助すべきか否か迷う傾向にある ($t=6.24, df=187, P<0.01$; $t=6.70, df=187, P<0.01$)。ベトナムの学生は日本の学生よりも肢体不自由児は担任教師や友達の重荷にならないと感じている ($t=3.89, df=187, P<0.01$)。

(3) イメージの差と態度との関連

SD法でベトナムと日本それぞれのイメージの高い群、低い群を設定した。イメージの高い群、低い群の分類は、個人得点が全体の平均得点に1標準偏差を加えた得点以上であればイメージの高い群、個人得点が全体の平均得点から1標準偏差を減じた得点以下であればイメージの低い群と分類した。4群(国別に分けたイメージの高い群、低い群)の平均得点に差があるかどうかを見るためにF検定を行った。更に1%ないし5%水準で有意差がみられた項目について、べ高×べ低、べ高×日高、べ高×日低、べ低×日高、べ低×日低、日高×日低のように各群それぞれをt検定を行

った。その結果を述べる。

「4：体の不自由な子どもは皆と同じように幸福である」では、べ高×日高、べ高×日低の間に1%水準で有意差がみられ、日高よりべ高の方が、日低よりべ高の方が肢体不自由児を皆と同じ幸福であると感じている傾向にある。また、べ高×べ低の間に5%水準で有意差がみられ、べ低よりべ高の方が肢体不自由児は皆と同じ幸福であると感じている傾向にある。これらのことからべ高は日高、日低、べ低よりも肢体不自由児を幸福だと思っていると言える。

「7：体の不自由な子どもが自由に行動できるように、道路や公共の建物を改造すべきである」では、べ高×べ低、べ高×日高、べ高×日低の間に1%水準で有意差がみられ、べ高よりべ低の方が、べ高より日高の方が、べ高より日低の方が肢体不自由児のために道路や公共建物の改良を求めている。これらの結果から、べ高は日高、日低、べ低よりも肢体不自由児のための道路や公共建物の改良を求めていると言え

る。「8：体の不自由な子どもと一緒に食事をするとは何となく気持ちが悪い」ではべ高×べ低、べ高×日低の間に1%水準で有意差がみられた。べ高よりべ低の方が、べ高より日低の方が食事場面での肢体不自由児との接触を避けたい傾向にある。べ高×日高の間には5%水準で有意差がみられた。べ高より日高の方が、食事場面での肢体不自由児の接触を避けたい傾向にある。これらの結果からべ高はべ低、日低、日高よりも肢体不自由児との接触を避けることを否定していると言える。

「13：体の不自由な子どもに気軽に声がかけられない」ではべ高×日高、べ高×日低の間に1%水準で有意差がみられた。べ高より日高の方が、べ高より日低の方が肢体不自由児に対して気軽に声がかけられない傾向にある。

「14：体の不自由な子どもと一緒に遊ぶことはできるだけ避けたい。」ではべ高×日高、べ高×日低、べ低×日低の間に5%水準で有意差がみられた。べ高より日高の方が、べ高より日低の方が、べ低より日低の方が生活場面で肢体不自由児との接触を避けたい傾向にある。

「15：体の不自由な子どもが普通学校に入ると、担任教師や友達の重荷になる」ではべ高×日高の間に1%水準で有意差がみられた。日高はべ高よりも肢体不自由児が普通学校にいると、担任教師や友達の重荷になると考えている傾向にある。

「16：体の不自由な子どもが歩いているとき、助ける必要があるかどうか迷う」ではべ低×日高、べ低×日低の間に1%水準で有意差がみられた。べ低より日高の方が、べ低より日低の方が肢体不自由児と町中で出会ったとき、助けるかどうか迷う傾向にある。

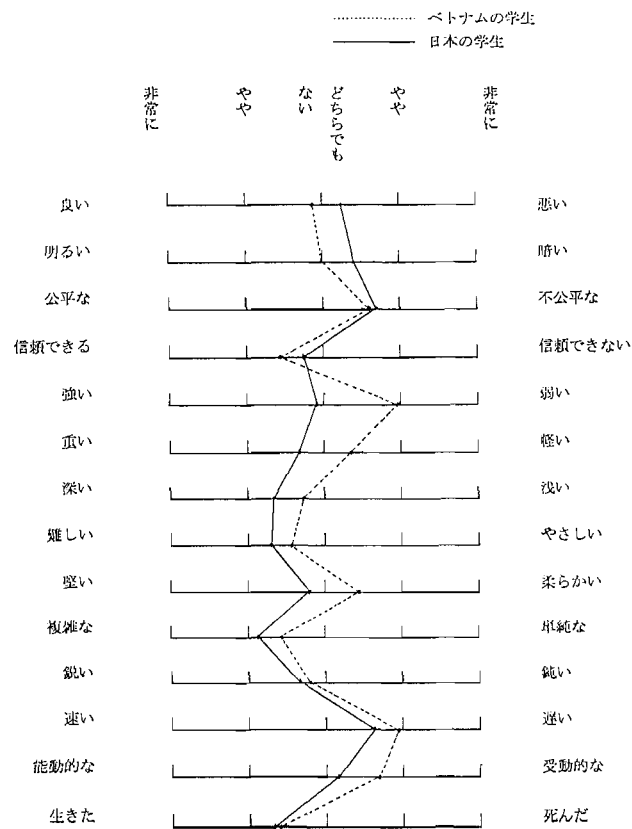


図1 国別に描いた「肢体不自由児」のプロフィール

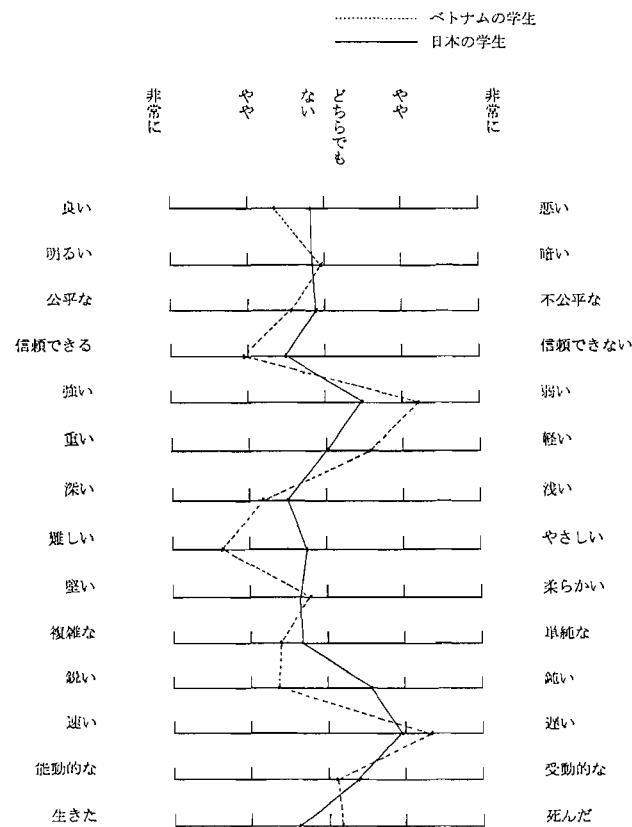


図2 国別に描いた「老人」のプロフィール

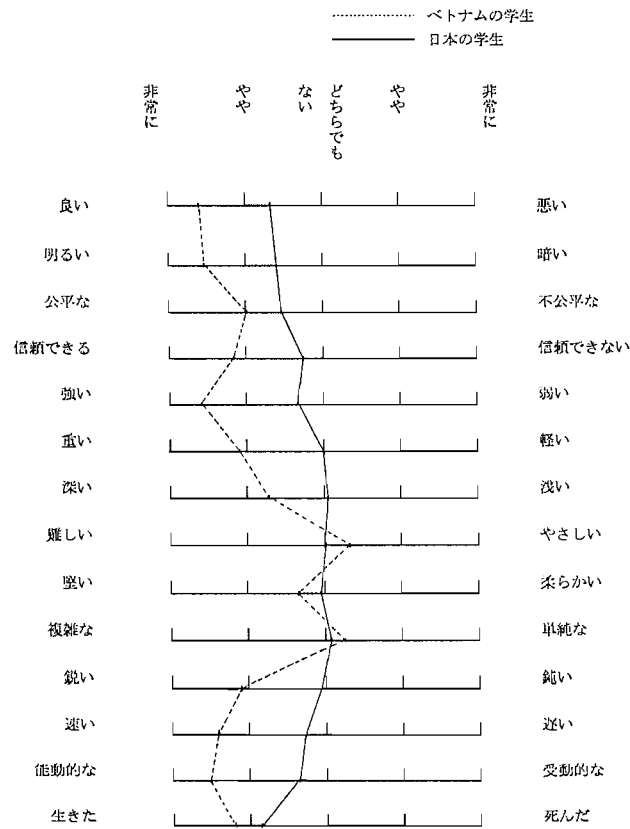


図3 国別に描いた「健常児」のプロフィール

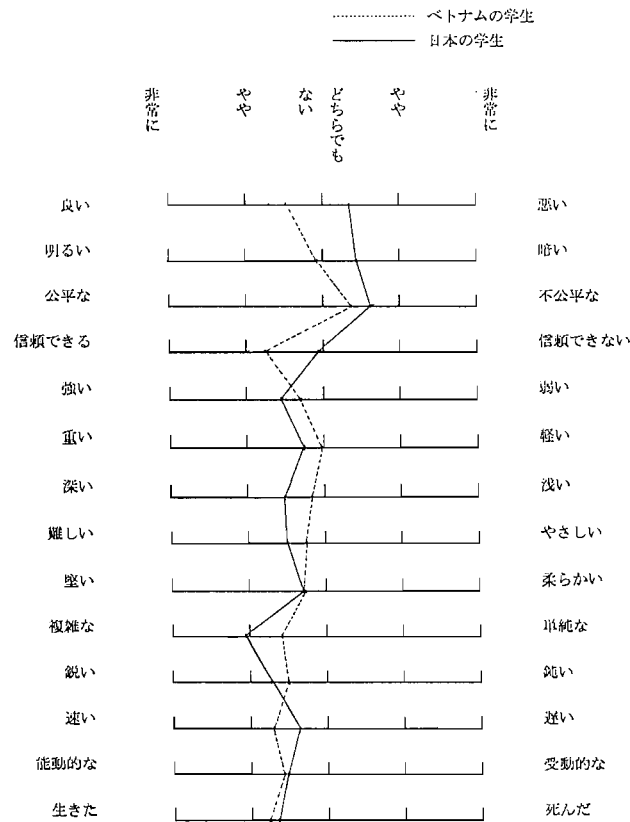


図4 国別に描いた「孤児」のプロフィール

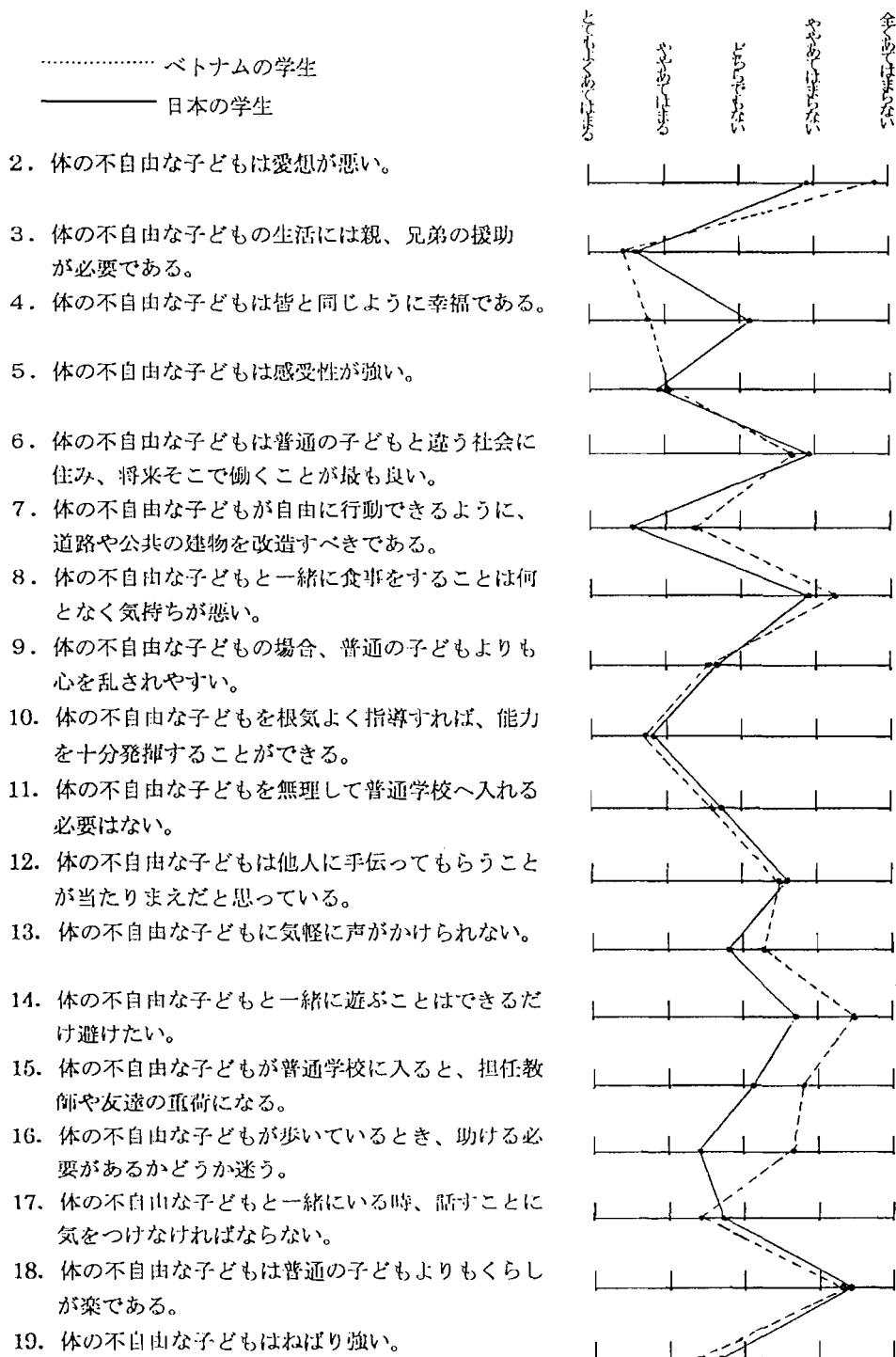


図5 国別に描いた生活自立に関する態度

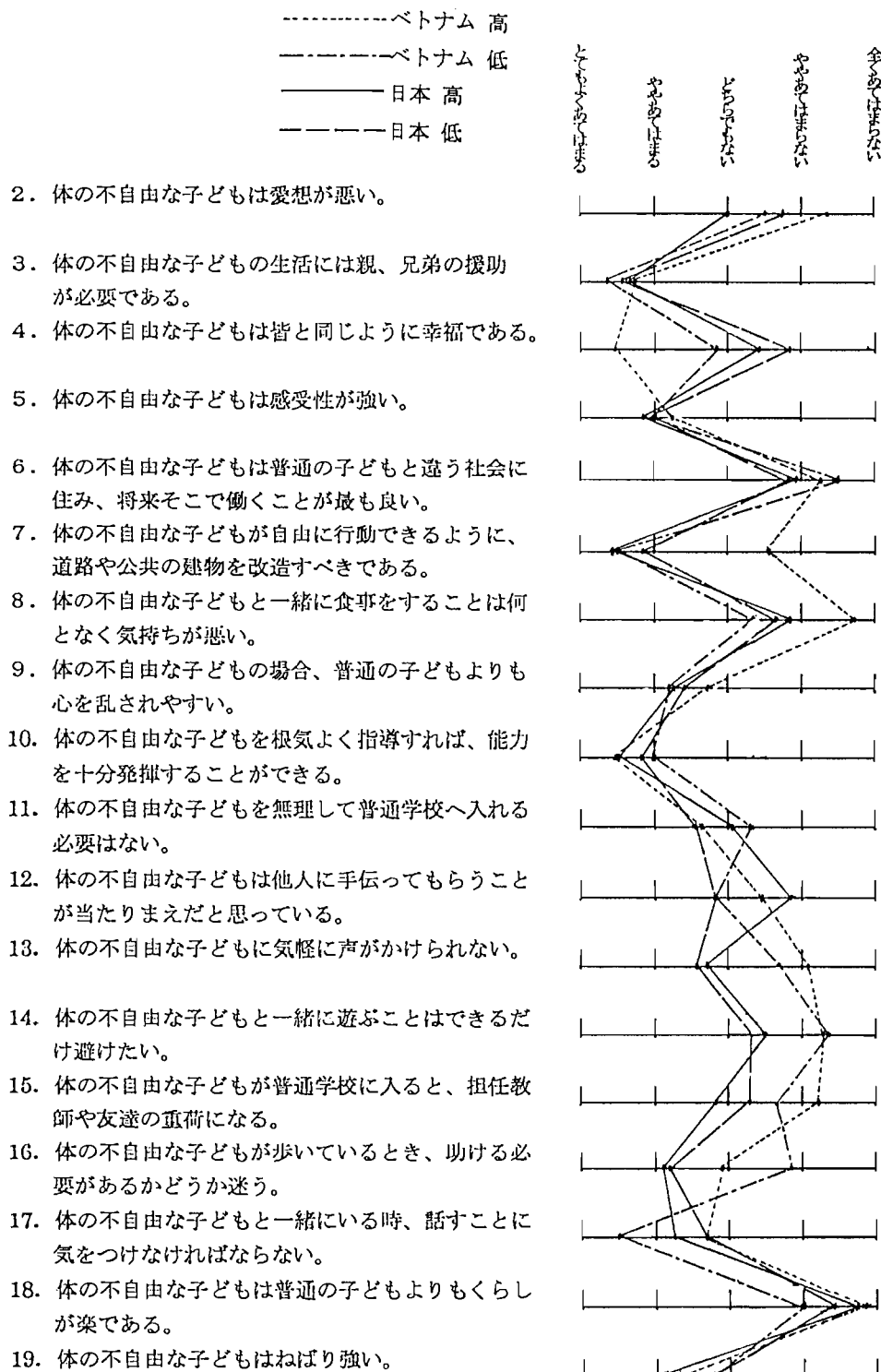


図6 国別のイメージの高い群、低い群に基づいた生活自立に関する態度

IV. 考察

(1) 「肢体不自由児」、「老人」、「孤児」、「健常児」の用語に対するイメージ

今回の調査では、「肢体不自由児」、「老人」、「孤児」、「健常児」の用語に対するイメージを検討した。中司(1988)は肢体不自由児の場合、韓国では古い障害児のイメージが有力であることが示唆されていたのに対して日本ではそのようなイメージは持たれていないことを報告している。さらに、日本の大学生による肢体不自由児のイメージは韓国の大学生のイメージが暗い、悲しいというようなマイナスの方向の形容詞によってもっぱら形成されていたのに対して、マイナスもあればプラスの方向の形容詞によっても形成されているということを示している。

本研究では、日本の学生による肢体不自由児のイメージは、複雑で、難しく、不公平といったマイナス方向の形容詞によって形成されていたのに対して、ベトナムの学生は、マイナスもあれば、生きたようなプラスの方向の形容詞によって形成されているということが明らかにされた。従って、ベトナムより日本の方が古い障害児のイメージが有力であることが示された。

(2) 肢体不自由児の生活自立に関する態度

本研究においては、まず肢体不自由児の生活自立に関する態度をベトナムと日本で比較した。その結果、7つの項目においてベトナムと日本の間で1%ないし5%の有意差がみられた。日本の学生はベトナムの学生より肢体不自由児を拒否する傾向にある反面、ベトナムの学生よりも道路や公共施設の改良を求めている。また、肢体不自由児自身を幸福だと思わず、いざ出会ったときは当惑したり、担任教師や友達の重荷になると考えている傾向にあると示された。このことから肢体不自由児に対しては社会的に望ましいことには賛成していても実際の態度は非好意的傾向にあることが推論される。これに対し、ベトナムの学生は日本の学生より肢体不自由児自身を幸福だと思わず、肢体不自由児を拒否したり当惑したり、担任教師や友達の重荷にならないと感じている人が多く、いずれも好意的傾向にあると推論される。

三沢(1971)はアメリカ、イスラエルとは反対に日本は四肢の機能的ハンディキャップよりも顔面や体系などの社会的ハンディキャップの方を好み、アメリカ、イスラエルとはかなり異なった独自の傾向が認められるという結果を示している。また、国内研究では視覚障害者(児)よりも肢体不自由者(児)の方が否定的に受け止められている(河内、1990)という研究結果を考えると、本研究では「肢体不自由児」しか取り上げなかったが、全体的に否定的傾向にあったことが示されている。精神遅滞児、聴覚障害児等の他の障害を

取り上げたならばもっと違った結果になったであろう。また、自国ではベトナムよりも肢体不自由児に対して拒否傾向にあるにもかかわらず、道路や公共施設の改良を求めている。これは、高木ら(1974)が指摘するように、具体的な事柄では非好意的な人でも、間接的な事柄になると好意的になることを示唆している。日本よりもベトナムの方が肢体不自由児を拒否したり、当惑したり、担任教師や友達の重荷にならないと感じている人が多いことをすでに述べた。ベトナム戦争の影響で統計的にもはるかに障害児・者が多く存在すること、また、障害児学校の教育保障は5年しかなく、田舎の方では障害児学校のない区もあることや、両親が共働きでかまってもらえない理由から普段、町中で頻りに障害児・者を見かけることが多いと推測される。このようなことからベトナムは日本よりも肢体不自由児を自然と受け止められる体制ができていると思われる。小川(1993)がベトナムのホーチミンの大学生と日本の大学生を対象に行った調査では宗教を信じている人はベトナムでは46.3%、日本では11.7%であった。また、信仰をもつことは人にとって幸福のためには必要だと考えている人がベトナムでは51.3%、日本では30.1%であった。ベトナム人の過半数が幸福を得るために宗教を信仰している。この結果からベトナムの方が日本より肢体不自由児自身を幸福だと考える傾向にあるのはこういった宗教が何らかの形で影響しているのではないかと考えられる。三沢(1979)の日本、アメリカ、イスラエルにおける一般人の意識の比較研究ではアメリカ、イスラエルよりも日本の方がネガティブな態度が底流で形成されていたことが示されているが、本研究でもベトナムと比較した結果、ネガティブな態度が形成されていると推論できる。

(3) 態度とイメージの高低の関連

べ高×日低、べ低×日高においても有意差がみられてはいるもののべ高×日高では6項目に有意差がみられており、イメージの高い群同士では国による違いがみられていると言える。加えて、べ低×日低の7項目中2項目において有意差がみられていることも考慮すると、ベトナム、日本という国全体の違いが態度構造に影響を及ぼしていると言える。また、日高×日低は7項目中すべてにおいて有意差がみられなかったのに対して、べ高×べ低では7項目中3項目において有意差がみられている。ベトナム国内ではイメージが態度構造に少なからず影響を与えていると言える。

IV. おわりに

日本とベトナムの女子学生に肢体不自由児に対してどのようなイメージ、態度構造をもっているのかを調査した。

肢体不自由児の用語に対するイメージを調査したと

ころ、日本の学生による肢体不自由児のイメージは、複雑で、難しく、不公平といったマイナスの方向の形容詞によって形成されていたのに対してベトナムの学生は、プラス、マイナス両方の形容詞によって形成されていることが示された。

肢体不自由児の生活自立に関する態度を調査したところ、ベトナムの学生よりも肢体不自由児に対する態度は非好意的傾向にあることが推論された。また、肢体不自由児に対して、直接的な接触は避けたいが、社会全体としては道路などの改良を行い、肢体不自由児を保護するべきであるという結果から、日本の学生は偽善的な態度を示していると推測される。それに対し、ベトナムの学生は比較的、直接的な接触を嫌がらない反面、道路の改良はそれほど求めていないという点から肢体不自由児を社会的弱者としては認めず、さらに歴史的背景も考慮すると、ベトナムは日本よりも肢体不自由児を身近な存在として受け入れているものと思われる。この2国間の肢体不自由児との身近さの違いが日本の学生のイメージの高低が態度構造に影響を及ぼさず、曖昧な評価しかされなかった理由と考えられる。

SD法で得られた結果からイメージの高い群、低い群に分け、それぞれの群が態度構造にどのような傾向を示すのかを検討した。日本-ベトナム間の場合、肢体不自由児に対してはイメージの高低より2国間の違いの方が態度構造により影響を及ぼしているものと推論された。

引用文献

- 1) 河内清彦 (1979) 視覚障害者 (児) に対する学生及び教師の態度-態度構造について- 特殊教育学研究, 17 (2), 19-32.
- 2) 河内清彦 (1990) 肢体不自由者 (児) に対する大学生の態度構造とその形成要因としての専攻学科及び性別の役割について 特殊教育学研究, 28 (3), 25-34.
- 3) 三沢義一 (1971) 身体障害者に対する態度とその比較文化的考察 特殊教育学研究, 9 (1), 27-32.
- 4) 三沢義一ら (1983) 日本、韓国及び台湾における障害児・者に対する態度に関する比較文化的研究 心身障害学研究, 8 (1), 81-103.
- 5) 中司利一 (1988) 日本と韓国における大学生による肢体不自由児に対するイメージ 特殊教育学研究, 25 (4), 29-42.
- 6) 中司利一ら (1992) 日本と韓国における大学生による役割理論に基づいた運動障害者のイメージ 心身障害学研究, 16, 69-77.